

日本における漢語「人間」の意味について

― 中世を中心に ―

（比較文化学専攻
日本アジア文化情報学講座 博士後期課程）

楊 琴

はじめに

本稿は、古く仏教語として日本に受容されたと思われる漢語「人間」が、本来の仏教教義から離れ一般語彙化したプロセスを、日本の言語史上に跡づける試みの一環である。即ち、「人間」という語の「この世・世の中」という意味と、それに内包される「この世に住む（ヒト）」という意味との分離変化の過程を、文献史のかつ語彙史的に検討する。「人間」という漢語の意味に、日本と中国とで、違いのあることは広く知られている。拙稿「日本における漢語「人間」の意味について―『性霊集』から『今昔物語集』まで―」（注1）では、空海が『性霊集』中で、漢文の修辞によって、「絶人間之腸」のような文を用い、「人間」が、「骸」「腸」などの身体語彙と組み合わせられることで、「ヒト」の意味が浮き彫りにされたことを指摘した。しかしながら、その傾向は仏教と深く関わる書物に偏っており、平安時代にはまだ「ヒト」の意味で広く用いられていたとは言えない。

『今昔物語集』以後、現代に至るまで、日本において、「ヒト」を意味する「人間」がいかに使われているか、どのように浸透し繁衍しているのかを考察するにあたって、この語を通時的かつ共時的、微視的かつ巨視的に検討することが必要される故に、本稿では中世における

「人間」が、どのような作品にどのように用いられているのを概観する。その考察手順は以下の通りに行われる。

一、中世に成立したといわれる作品「漢詩文」「日記・紀行」「物語」「説話」「歌論」「能楽」「その他」のジャンル、及び当時において多大な影響を持つと言われる個別人物親鸞・日蓮の著作から、「人間」の用例を収集する。

二、前後の語や文脈との関わりによって、それらの用例が、どのように用いられているのかを検討する。「人間」の意味について、次のように大別して確認する。

（1）「人の世・世の中・世俗社会・六道の一つ（人間界）」―明瞭に「六道」の一つとしての「境界空間」の意味に解釈することができる。
（2）「この世に住む（ヒト）」―明白に「境界空間」に存在する「ヒト」そのものの意味に読み取れる。

文章前後の文脈や語の関わりによって、はっきりした「ヒト」そのものの意味でなく、「この世・世の中」という「境界空間」の意味のみならず、そこに「ヒト」の意味も内包されていると、どちらとも解釈できるグレーゾーンのような例を、（3）にする。

「人の世・世の中・世俗社会」

(3) ↓
「人の世に住む(ヒト)」

三、以上の考察結果を踏まえ、中世の作品における「人間」という語の使用様相の実態を把握し、『性霊集』から『今昔物語集』までに呈した様相(散発的に現れている)と比べ、どの様な変化があるのかを検証する。なお、『宝物集』、『正法眼蔵』、『唱導資料』(『安居院唱導集』『弁曉説草』『湛睿説草』)『軍記物語』について、筆者が別稿で扱った故に、本稿の調査対象外とする。

一、「漢詩文」における「人間」

本節では、前代に引き続き、中世五十山十刹の官寺に属する禅僧によって作られた漢詩文の作品における「人間」が、どのように使われているかを概観し、「人間」の使用実態に変化があるかどうかを考察する。「新日本古典文学大系48」(以下「新大系」)(注2)と、「日本古典文学大系89」(以下「旧大系」)(注3)の所収作品を調査対象とした。「人間」の用例が、『蕉堅藁』で(1例)、『空華集抄』で(1例)見られるが、それ以外の作品には、認められなかった。「旧大系」所収の作品において、「人間」の用例が『松山集』『東海一嘯集』『随得集』『閻浮集』の四作品には1例ずつ見られる。しかしながら、その以外の作品には、用例が認められなかった。「新大系」「旧大系」両書にみえる用例(合計6例)を次に挙げ、文章前後の文脈や語との関わりによって、採集した用例における「人間」の意味を確認する。

1 空王住処堪依止、回首人間事々乖(空王の住む処 依止するに堪ふ、首を回らせば人間は事々乖く)『蕉堅藁』「山居十五首、次禪月韻

(十二)(七一頁)

2 睡起西窓吟撫几、人間得喪付鷄虫(睡りより起き西窓に吟じて几を撫で、人間の得喪を鷄虫に付す)『空華集抄』「遣悶」(二三〇頁)

3 人間槐樹都千變 秦外桃花只一竿(人間の槐樹には 都て千變あれども 秦外の桃花には 只一竿のみあり)『松山集』「題漁磯」(七十頁)

4 天上日色薄 人間是非隆(天上に日色は薄く 人間に是非は隆んなり)『東海一嘯集』「擬古」(八七頁)

5 人間万事不如休 馳逐東西到白頭(人間の万事は休するに如かざるに 東西に馳逐して白頭に到る)『随得集』「人間万事不如休」(九六頁)

6 抖擻人間名利埃 禪袍静衲座青苔(人間の名利の埃を抖擻せんと 禪袍と静衲とにて青苔に座せば)『閻浮集』「山居」(二一〇頁)

例1から例6における「人間」は、(1)「人の世・世の中・世俗社会・六道の一つ(人間界)」―「六道」の一つとしての「境界空間」の意味に用いられているとみてよい。

二、「日記・紀行」における「人間」

本節では、仏教思想や宗教性・人生観などにもまつわる和漢混淆文の「日記・紀行」作品における「人間」が、どのような作品でどのように使われているかを概観する。「新編日本古典文学全集48」(以下「新編全集」)(注4)所収作品を考察対象とした。「新編全集」所収の「日記・紀行」のうち、「人間」の用例が見られたのは、『海道記』には(1例)、『十六夜日記』には(1例)である。『信生法師日記』『東関紀行』『弁内侍日記』『十六夜日記』『春の深山路』には「人間」の用例が認めら

れなかった。また、十四世紀後半から十六世紀後半までに成立した『道行きぶり』『なぐさみ草』『覽富士記』『東路のつと』『吉野詣記』『九州道の記』『九州の道の記』にも「人間」の用例が認められなかった。見出した例文を次に挙げ、文章前後の文脈や語との関わりによって、「人間」の意味を確認する。

7 今生を生死の終とし、当来を解脱の始とする、人間に生まれて、此の縁に逢ひたり。『海道記』三五 結論―極楽浄土は胸の中にあること

(八一頁)

8 人間だに袖や濡れまし旅衣たつ日を聞かぬ恨みならずは、『十六夜日記』「一四式乾門院御匣との贈答」(二八九頁)

例7に挙げた『海道記』にある「人間に生まれて」という表現は、「人間界あるいは人間界のヒトに生まれ」、のように、「この世・世の中」という「境界空間」の意味のみならず、そこに「ヒト」の意味も内包されていると思われるゆえに、(3)の両方の意味に用いられていると考えられる。例8における「人間」は、「ひとま(人のいない時・人目のないすき)」という語として使われている故に、考察の対象から除く。

三、「物語」における「人間」

本節では、「中世王朝物語全集」(注5)と、「室町物語集」所収作品(注6)を考察対象とし、「物語」というジャンルにおける「人間」が、どのような作品でどのように使われているかを概観する。

三―一、「中世王朝物語全集」における「人間」

まず、「中世王朝物語全集」(1~8)所収作品を考察し、「人間」という語がこの王朝物語シリーズにおいて、どのように使われているかを概観する。「人間」の用例が『海人の刈藻』で(1例)見られるが、その以外の作品には用例が認められなかった。『海人の刈藻』にみえる例文を左に掲出し、文章前後の文脈や語との関わりによって、「人間」の意味を確認する。

9 上もこなたにおはしますほどにて、このほどの御物語聞ゆ。

人間に、かの人の立ち寄り給ひしこと、『海人の刈藻』巻三 一九

大納言の君ら、関白邸に帰参し報告」(一四三頁)

例9にみえる「人間」が、『十六夜日記』と同様に、「ひとま(人のいない時・人目のないすき)」という語として使われている故に、考察の対象から除く。「中世王朝物語全集」(1~8)所収作品には、「人間」の用例が認められなかった。

三―二、「室町物語集」における「人間」

次に「室町物語集」所収作品のうち、「人間」の用例が、『鴉鷲物語』で(2例)、『伊吹童子』で(1例)、『岩屋の草子』で(2例)、『さ、やき竹』で(1例)、『俵藤太物語』で(3例)、『毘沙門の本地』で(1例)、『弁慶物語』で(6例)見られる。採集した「人間」の例文を次に掲出し、文章前後の文脈や語との関わりによって、「人間」の意味を確認する。

10 年に一度逢ふとはいへども、人間のためには一日一夜なり。此時、鳥と鵲と羽をならべて橋となりて、彥星、七夕を通はすなり。『鴉

驚物語「第二」(九七頁)

11 六道の輪廻は念によりて生を受く。人間の百事、見てもむなしく聞ても愚か也。『鴉驚物語』「第十二」(一八三頁)

12 さるほどに大野木殿はこのよしをきこしめし、大きに驚き給ひ、いかさまは人間にては有べからず、鬼のたぐひなるべし、『伊吹童子』(一九一頁)

13 大宰府に下るとて、明石の浦にて人間に相応せぬ者として竜宮城へ取られてこそ、四位の少将は書写の山にて行ふと聞こえしか。『岩屋の草子』(二五七頁)

14 我人間に生を受けて、五人の親を持ちたり。『岩屋の草子』(二六三頁) いやとよ、夫婦の縁はこれ人間の計らふ事にあらず。『さ、やき竹』(四〇五頁)

16 もし人間にしかるべき器量の人ましまさば、ちなみ寄りてたのみ侍らばやと思ひ、『倭藤太物語』(九三頁)

17 天上の五衰、人間の八苦、竜宮の三熱とて、いづれも苦のなき国はなし。『倭藤太物語』(二〇二頁)

18 さるほどに藤太秀郷は、将門のありさまをみて、「これは、人間のふるまひにはあらず。(略)」と思ひ、『倭藤太物語』(二二七頁)

19 「姫宮はもとより此国の人也。仮に人間に生まれたり。(略)」とて、『毘沙門の本地』(一九六頁)

20 弁慶聞きて嬉しがり、人間の物は手に足らず、さやうの我慢なる物に手並みを見せん、『弁慶物語』(二四四頁)

21 弁慶は不思議の思ひをなし、さては人間の人にてはなかりけり。『弁慶物語』(二五一頁)

22 人間の人ならば、かほどにかはゆく弁慶が負くる事はあるまじ。『弁慶物語』(二五一頁)

23 もし人間の者ならば、道心起こして、その後に会はんも、『弁慶物語』(二五二頁)

24 もし人間の者ならば、三月がうちに会はぬ事はあるまじ。『弁慶物語』(二五二頁)

25 「さては神にてましまさず、人間の物にてありけるよ」と、『弁慶物語』(二五二頁)

「室町物語集」所収作品にみえる「人間」が、例11『鴉驚物語』の「人間の百事」、例13『岩屋の草子』の「人間界に相応せぬ者」、例14「人間界に生を受けて」、例16『倭藤太物語』の「人間界にしかるべき器量の人」、例17「天上」に対応するために用いられる「人間界の八苦」、『弁慶物語』の例20「人間界の物」、例21「人間界の人」、例22「人間界の人」、例23「人間界の者」、例24「人間界の者」、例25「人間界の物」のように、「六道」の一つとしての「人間界」という意味で用いられているので、(1)「境界空間」の意味に用いられているほか、例10『鴉驚物語』の「人間に住む(ヒト)のため」、例12『伊吹童子』の「鬼に対応する人間界にすむ(ヒト)」、例18『倭藤太物語』の「人間のふるまひ」のように、(2)「この世に住む(ヒト)」の意味にも用いられている。さらに、例15「さ、やき竹」の「人間の計らふ事」、例19『毘沙門の本地』の「人間界あるいは人間界のヒトに生まれ」、のように、「この世・世の中」という「境界空間」の意味のみならず、そこに「ヒト」の意味も内包されていると、(3)の両方の意味に用いられている。

四、「説話」における「人間」

本節では、「説話」(注7)作品における「人間」が、どのように使われていたかを概観する。「説話」作品に用いられる「人間」の用例

が20例見られる。『古事談』『続古事談』『閑居友』『宇治拾遺物語』には用例が認められなかった。『江談抄』で(3例)、『古本説話集』で(1例)、『発心集』で(3例)、『撰集抄』で(1例)、『十訓抄』で(5例)、『古今著聞集』で(2例)、『沙石集』で(5例)が見られるが、それほど多く見出すことはできなかった。採集した「人間」の例文を次に挙げ、文章前後の文脈や語との関わりによって、「人間」の意味を確認する。

- 26 この花はこれ人間の種にあらず 樹の枝頭の第二の花なり『江談抄』第四 七二(二四一頁)
- 27 この花はこれ人間の種にあらず 再び平台一片の霞に養はれたり『江談抄』第四 七二(二四一頁)
- 28 予云はく、左府は曲水の宴の落句は凡流にあらず、人間この会応に希有なるべし。『江談抄』第五 七〇(二〇九頁)
- 29 その後、人間^まをはかりて、この龍樹菩薩は、賢く宮の内を逃げ給て、法師になり給て、かく龍樹菩薩とは崇められ給なりけり。『古本説話集』(四九三頁)
- 30 聖、此の僧にすすむれば、是を食ひをはりぬ。味はひの妙なる事、人間の食にあらず。『発心集 第四』「一 三昧座主の弟子、得法華経験の事」(一六六頁～一六八頁)
- 31 聖の云ふやう、「いとふにはあらず。遙かに人間の気を離れて、多くの年をへたる故に、…」と教ふ。『発心集 第四』「一 三昧座主の弟子、得法華経験の事」(一六六頁～一六八頁)
- 32 此の中に、ある輩の云はく、「あやしきかな、常に似ず、人間のけあり。『発心集 第四』「一 三昧座主の弟子、得法華経験の事」(一六六頁～一六八頁)

33 常に人間榮耀は因縁浅、林下幽閑気味深と思ひとりながら、『撰集抄』第九卷 第二 貞基事(三七三頁)

例26～例28に挙げた『江談抄』における「人間」は、明瞭に「六道」の一つとしての「境界空間」の意味に解釈することができるが、例29の『古本説話集』にみえる「人間」には、「ま」の読み方が付記され、「ひとま(人のいない時・人目のないすき)」という語として使われている故に、考察の対象から除く。例30～例32にみえる『発心集』にみえる一節「三昧座主の弟子、得法華経験の事」は、『法華経験記』『今昔物語集』にも類似話が見られる。この一節で使われた「人間の気」は前稿(注8)で論じたように、人間界からきた者の匂いがした(即ち、現代語の「人の気配がする」ということから、「ヒト」を指す。但し、「人間の食」という文言は、やはり「この世・世の中・六道の一つ(人間界)」の「食」と理解すべきであろう。しかしながら、『発心集』における「人間」はこの一節しか見出すことはできなく、前代の文献から引用したそのままの形で、存在している。例33の『撰集抄』に見える「人間榮耀」という文言は、漢文のままに引用しているので、「境界空間」意味の「この世・世の中」に解釈する。

- 34 かくのごとくの人、形は人間にありといへども、心さきだて、餓鬼の因を結びおくものなり。『十訓抄』「六ノ二十九」(二六二頁)
- 35 王母うち笑ひて、「天上の果、人間にとどまりがたくや」と申して、『十訓抄』「七ノ一」(二八六頁)
- 36 「ただはかるべからざるは、人間の笑めるは、これ、いかれるならむということ」ともいへり。『十訓抄』「七ノ二十七」(三三四頁)
- 37 そもそも、人間の八苦の中には、怨憎会苦といへるは、ものの恨

めしきなり。『十訓抄』九ノ五（三七八頁）

- 38 かの修因因果の、かぎりなき政事の中にも、かやうのことにつきて、なほ冥慮各別なり。いはむや人間をや。『十訓抄』十ノ七十九（四九〇頁）

例34→例38に挙げた『十訓抄』における「人間」は、前後の語や文脈との関わりによって、例35のように、明白に「天上」と対置する「人間界」の意味に解釈することができる用例が存在する一方、例34「形は人間にありといへども」、例36「人間の笑める」、例37「人間の八苦」、例38「地獄冥官の冥慮」に対する「人間」といった「この世・世の中」という「境界空間」の意味のみならず、そこに「ヒト」の意味も内包されていると、どちらとも解釈できるグレーゾーンのような例が目立つ。これらの用例ははっきりした「ヒト」そのものの意味に読み取れることができないが、「ヒト」という存在が濃厚になってきていると感じられる。

- 39 其性いさぎよくして、偏に人間の榮耀をかるしめて、只山林幽閑を忍び、終に当寺の蘭若をしめて弥陀の淨刹をのぞむ。『古今著聞集』「巻第二（釈教第二）」（七三頁）

- 40 はてには野山にてさそらひける。人間のありさま、これにてもしるべし。『古今著聞集』「巻第五（和歌第六）」（二八二 小野小町が壮衰の事」（二六八頁）

例39にみえる『古今著聞集』の「人間榮耀」は、漢文のままで「人の世・世の中・世俗社会」の意味であるが、例40の「人間のありさま」は「小野小町の壮衰の事」から「世の中」或いは「世の中に住むヒト」

を説いたもので、(3)のグレーゾーン例に解釈するであろう。しかしながら、「世の中」より、「世の中に住むヒト」の意味が浮かび上がってきているとみられる。

- 41 『我今度生死を出離せずして、人間に生まるれば、当社の神官と生まれて、和光の方便を仰ぐべし』とぞ誓ひ給ひける」と語り侍りき。『沙石集』「巻第一ノ二」「解脱房の上人の参宮の事」（二七頁）

- 42 聴聞して論義問答なむど、人間にたがはず。『沙石集』「巻第一ノ六」「和光の利益の事」（四〇頁）

- 43 人間忽々として、冥途の近付く事をも知らず。『沙石集』「巻第五末ノ七」「権化の和歌詠び給ふ事」（三〇九頁）

- 44 仏勅を受けて人間に下りて、仏法を聞き、仏子を守る。『沙石集』「巻第六ノ十三」「袈裟の徳の事」（三四七頁）

- 45 人間の臭き事、上四十万里なり。『沙石集』「巻第六ノ十三」「袈裟の徳の事」（三四七頁）

例41→例45に挙げた『沙石集』にみえる、例43「人間忽々」、例44「人間に下りて」、例45「世の中」を指す「人間」は、明瞭に「六道」の一つとしての「境界空間」の意味に解釈することができる。そのほか、例41「人間に生まるれ」、例42のような「人間界」だけでなく、「その境界に住むヒト」とも解釈することができる用例も見られる。

以上のように、「説話」作品における「人間」の意味を確認した。「境界空間」を表す「人の世・世の中・世俗社会」といった意で用いられる一方、「境界空間」の意味のみならず、そこに「ヒト」の意味も内包されていると、どちらとも解釈できるグレーゾーン例が目立つ。しかしながら、明白に「境界空間」に存在する「ヒト」そのものの意味

に読み取れる用例が認められなかった。

五、「歌論」にみえる「人間」

本節では、「歌論」というジャンルの作品における「人間」の使用実態を概観する。「歌論集」(注9)所収の作品を調査対象とした。「歌論集」所収作品のうち、「人間」の用例が見られたのは、『正徹日記』の(1例)である。『無名抄』『近代秀歌』『詠歌大概』『毎月』『後鳥羽院御口傳』『為兼卿和歌抄』には「人間」の用例が認められなかった。採集した「人間」の例文を次に挙げ、文章前後の文脈や語との関わりによって、その意味を確認する。

46 和哥の絶えんとする時必ず人間に再来して、此道をつぎ給ふべき也。『正徹日記』(一六九頁)

『正徹日記』にみえる例46は、六道の一つの「人間界に再来して」に解釈すべきであるから、(1)「境界空間」の意味に用いられている。

六、「能楽」にみえる「人間」

本節では「能楽論集」(注10)所収の作品を調査対象とした。「人間」の用例が『風姿花伝』で(1例)、『花鏡』で(1例)、『申楽談儀』で(2例)見られる。『至花道』『遊楽習道風見』『九位』『拾玉得花』『三道』では用例が認められなかった。採集した「人間」の例文を左に掲出し、文章前後の文脈や語との関わりによって、「人間」の意味を確認する。

47 浦人舟を上げて見れば、形人間に変「れ」り。諸人に憑き崇りて、

奇瑞をなす。『風姿花伝』(三七〇頁)

48 是は、生死に輪廻する人間の有様をたとへ也。『花鏡』『万能館一心事』(四二八頁)

49 「人間ふれいの花盛り、無常の嵐音添ひ」の「無常の」と移る所、悠々としても延ぶべし。『申楽談儀』「二 拍子的事」(五〇八頁)

50 然れども、今現在の人間地なれば、呂の聲にて祝言をば言うべき也。『申楽談儀』「別本聞書 声の律呂」(五四三頁)

例47にあげた『風姿花伝』の「形人間に変「れ」り」は、「人間界」という空間境界でなく、「人間界」という空間境界に住む「ヒト」に変わると理解すべきであるから、(2)「この世に住む(ヒト)」そのものの意味に解釈する。例48にみえる『花鏡』の「人間の有様」は、「人間界の有様」と「人間界に住む「ヒト」の有様」との両意味に理解することが出来る故に、(3)のグレイゾーン例に解釈する。例49にみえる『申楽談儀』の「人間ふれいの花盛り」という文章は、漢文のまじりつけたものであり、(1)「人の世・世の中・世俗社会」の意味に用いられている。例50にみえる『申楽談儀』の「現在の人間地なれば」という文章は、文章前後の文脈によって「現在の人間が地なれば」とも読み取れる。どう解釈するかによって、「人間」の意味が違ってくる。よって、この例の「人間」は、(3)のグレイゾーン例に解釈する。

七、他ジャンルの作品にみえる「人間」

本節では、一節から六節まで考察したジャンル以外の作品における「人間」が、どのような作品でどのように使われているかを概観する。『随筆』(「万丈記」『徒然草』(注11)「仏教書」(「歎異抄」(注12)「雅楽」(「続教訓抄」(注13)「茶道書」(「喫茶養生記」(注14)「物語評論」(「無名草子」

(注15)「書道論書」(『入木抄』)(注16)を調査対象とした。「人間」の用例が『徒然草』で(6例)、『続教訓抄』で(12例)見られる。『方丈記』『歎異抄』『喫茶養生記』『無名草子』『入木抄』では用例が認められなかった。採集した「人間」の例文を次に掲出し、文章前後の文脈や語との関わりによって、「人間」の意味を確認する。

51 竹の園生の末葉まで、人間の種ならぬぞやんごとなき。『徒然草』(八一頁)

52 人間の儀式、いづれの事が去り難からぬ。『徒然草』(二六九頁)

53 第一に食う物、第二に着る物、第三に居る所なり。人間の大事、この三つには過ぎず。『徒然草』(一七七頁)

54 人間の営みあへるわざを見るに、『徒然草』(二二一頁)

55 人間常住の思ひに住して、かりにも『徒然草』(二四九頁)

56 ただ人間の望みを断ちて、『徒然草』(二五〇頁)

『徒然草』にみえる6例のうち、例51「人間界の種」、例55「人間常住」のような、明瞭に「六道」の一つとしての「境界空間」の意味に解釈する用例が存在する一方、例52「人間の儀式」、例53「人間の大事」、例54「人間の営み」、例56「人間の望み」のような、「この世・世の中」という「境界空間」の意味のみならず、そこに「ヒト」の意味も内包されていると、どちらとも解釈できるグレーゾーンのような例も存在する。しかしながら、「ヒト」そのものの意味に用いられる用例が見出すことは出来なかった。

57 太宗為_二秦王_一時、征_二伐四方_一人間歌謡有_二秦王破陳之曲_一『続教訓抄』(第二冊)(二一九頁)

58 征_二伐四方_一人間歌謡有_二秦王破陳之曲_一『続教訓抄』(第二冊)(二二〇頁)

59 屡有_二征伐_一人間有_二此歌_一『続教訓抄』(第二冊)(二二〇頁)

60 是故_二人間_一此舞アリ、『続教訓抄』(第二冊)(二二〇頁)

61 取替テコレヲ吹ニ、人間ニ比類ナシ、『続教訓抄』(第十二卷)(五〇四頁)

62 後ノ世ノイトナミトセムコト人間ノ生ニスキタルハ待マシ『続教訓抄』(第十三卷)(五四九頁)

63 人間界トイヒナカラ、日本ハコトニスケレタリ『続教訓抄』(第十三卷)(五四九頁)

64 抑モノ、心ヲ、モフニ、人間ニ生スル事、マコトニ浮木ノ穴ニアヘル『続教訓抄』(第十三卷)(五八〇頁)

65 彼六道ト申ハ、地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、天上ナリ『続教訓抄』(第十三卷)(五八二頁)

66 人間ノ九十億年ヲ一日一夜トシテ『続教訓抄』(第十三卷)(五八二頁)

67 経律異相ニハ人間モ餓鬼アリトソ申テ侍ル『続教訓抄』(第十三卷)(五八四頁)

68 次ニ人間ヲ申サハ、十六ノ苦ヲタテタレトモ、『続教訓抄』(第十四卷)(五八八頁)

『続教訓抄』にみえる12例のうち、例57、例67に用いられる「人間」は、「六道」の一つとしての「境界空間」の意味に解釈されるが、例68にみえる「人間」は、「人間界」の意味のみならず、「人間界に住む(ヒト)」たちが十六の苦を受けるから、(3)のグレーゾーン例に解釈すべきであろうと思われる。「ヒト」そのものを意味する「人間」の用例が見出すことは出来なかったが、『徒然草』『続教訓抄』には、

グレイゾーン例が存在する。

八、親鸞・日蓮における「人間」

本節では、親鸞・日蓮の作品（注17）を調査対象とした。親鸞の作品では「人間」の用例が認められなかった。日蓮の作品においては、「人間」の用例が『守護国家論』で（2例）、『顕謗法抄』で（7例）見られる。これらの例文を次に掲出し、文章前後の文脈や語との関わりによって、「人間」の意味を確認する。

- 69 人間に生まれる人、「守護国家論」（四三頁）
70 人間の生を受けることは爪の上の土よりも少なし。「守護国家論」（六三頁）
71 此地獄の寿命、人間の昼夜五十年をもて第一四王天の一日一夜として、「顕謗法抄」（七六頁）
72 人間の二百歳を第三の夜摩天の一日一夜として、「顕謗法抄」（七七頁）
73 いわば人間の四百歳第四の都卒天の一日一夜とす。「顕謗法抄」（七八頁）
74 譬へば人間の火の薪の火よりも鉄銅の火の熱如し「顕謗法抄」（七九頁）
75 寿命の長短者人間の千六百歳は第六の他化天の一日一夜として「顕謗法抄」（七九頁）
76 末代に入て人間に生ぜん者は爪の上の土の如し「顕謗法抄」（八〇頁）
77 此の地獄の臭き氣ををさえて、人間へ来ざる故に、「顕謗法抄」（八一頁）
『守護国家論』『顕謗法抄』にみえる「人間」が、「六道」の一つとし

ての「境界空間」の意味に用いられている。

終わりに

本稿は中世における「人間」が、どのような文献にどのように用いられているのを概観したものである。以上のように「人間」の例文を掲載し、「人間」の意味について確認した。各節の調査から以下のことが分かった。

一、平安末期までの「漢詩文」は、貴族のみならず、文章博士・宮博士などの要職に就いた要人などの手に編纂され、作られたものであり、中国の漢詩文に倣いながら、日本独自の和歌・文章・願文・公文書なども用いられている。時代が下るにつれ、中世の「漢詩文」は、主に五山十刹の官寺に属する禅僧によって作られたものである。それにも関わらず、「人間」の意味にずれが生じていないことは、古代中国の「漢詩文」が日本の思想や文化に深く根ざしていることを明示している。

二、『海道記』にみえる1例の「人間」は、「人間界あるいは人間界のヒトに生まれ」、のように、「この世・世の中」という「境界空間」の意味のみならず、そこに「ヒト」の意味も内包されていると思われるゆえに、(3)の両方の意味に用いられていると考えられる。『十六夜日記』にある1例の「人間」は、漢語「人間」でなく、和語の「ひとま」として用いられている。『海道記』以外の「日記・紀行」というジャンルでは、「人間」という語自体が認められなかった。

三、「室町物語集」の所収作品では、「ヒト」を意味する「人間」の用例が、『鴉鷲物語』『伊吹童子』『俵藤太物語』にある。

四、「説話」における「人間」は、(1)人の世・世の中・世俗社会と、(3)グレイゾーン例とに用いられている。『発心集』は前代の文

献から引用したそのままの形で、存在しているが、『十訓抄』『古今著聞集』『沙石集』にみえる「人間」の意味合いは、明白に「境界空間」に存在する「ヒト」そのものに解釈することができなかったが、「心」「形」などの身体を表す語が混淆しわかりにくくなり、「世の中」の意味より、「世の中に住むヒト」の意味へと移り変わっていく傾向が見られる。

五、「歌論」というジャンルの作品における「人間」が、漢文に因む書籍であるか、(1)「境界空間」の意味だけに用いられている。

六、「能楽論集」の所収作品では、「ヒト」を意味する「人間」の用例が、『風姿花伝』にある。

七、「随筆」「仏教書」「雅楽」「茶道書」「物語評論」「書道論書」には、「ヒト」を意味する「人間」の用例が見出すことは出来なかったが、『徒然草』『続教訓抄』には、グレーゾーン例、即ち(3)の両方の意味に用いられている例が存在する。

八、親鸞の作品では「人間」の用例が認められなかったが、日蓮の作品『守護国家論』『顕勝法抄』における「人間」が、「六道」の一つとしての「境界空間」の意味のみに用いられている。

このように、「人間」の「ヒト」を意味する用例は中世にも見られるが、限られるジャンルあるいは限定される作品に現れているものである。その傾向は前代と変化なく、純粹な漢詩文を除き、仏教と深く関わる書物に偏ることを示している。したがって、「人間」は中世にすでに「ヒト」の意味で一般的に用いられていたと結論付けるには、なお慎重でなければならない。

注

- 1 楊琴「日本における漢語「人間」の意味について―『性霊集』から『今昔物語集』まで―」『和漢比較文学』五十号二〇一三年
- 2 入矢義高校注『五山文学集』『新日本古典文学大系48』（岩波書店一九九〇年）『蕉堅藁』『寂室和尚語』（底本…五山版）『東海一嘯集抄』（底本…東京大学史料編纂所蔵の古写本）『空華集抄』『済北集抄』『岷峨集抄』『南遊・東帰集抄』『叩余集抄』『了幻集抄』（底本…五山文学全集版）
- 3 山岸徳平校注『五山文学集 江戸漢詩集』『日本古典文学大系89』（岩波書店 一九六六年）（底本…若干の板本のほかは、五山文学全集と、続群書類従所収本）
- 4 『中世日記紀行集』（新編日本古典文学全集48）小学館一九九四年『海道記』（底本…尊経閣文庫 校注・訳 長崎健）『信生法師日記』（底本…宮内庁書陵部蔵 校注・訳 外村南都子）『東関紀行』（底本…鴨長明道の記）とある正保五年版本 校注・訳 長崎健）『弁内侍日記』（底本…内閣文庫蔵「寛元記」本 校注・訳 岩佐美代子）『十六夜日記』（底本…九条家本 校注・訳 岩佐美代子）『春の深山路』（底本…平野神社蔵本 校注・訳 外村南都子）『道行きぶり』（底本…桂宮本 校注・訳 稲田利徳）『なぐさみ草』（底本…早稲田大学図書館蔵本 校注・訳 稲田利徳）『覽富士記』（底本…永青文庫蔵 校注・訳 稲田利徳）『東路のつと』（底本…祐徳稲荷神社蔵中川文庫本 校注・訳 伊藤敬）『吉野詣記』（底本…国文学資料館所蔵の『称名院道中記』 校注・訳 伊藤敬）『九州道の記』（底本…永青文庫蔵 校注・訳 伊藤敬）『九州の道の記』（底本…慶安二年板『挙白集』（第六）収載の「九

州のみちの記」の本文 校注・訳 稲田利徳)

5

『中世王朝物語全集』(笠間書院)『あきざり』(底本…上巻―村上
文庫蔵本、下巻―厳島神社所蔵野坂本を参照)『浅茅が露』(底本…
天理大学附属天理図書館蔵本)校訂 福田百合子 訳 鈴木一雄
(他)『中世王朝物語全集1』笠間書院 一九九九年『海人の刈藻』
(底本…宮内庁書陵部蔵の四冊の写本)校訂・訳注 妹尾好信『中
世王朝物語全集2』笠間書院 一九九五年『いばでしのぶ』(底
本…巻一―京都大学文学部蔵甲本、巻二―宮内庁書陵部蔵本、巻
三―巻八―抜書本の三条西家本)校訂・訳注 永井和子『中世王
朝物語全集4』笠間書院 二〇一七年『清水物語』(底本…射
和文庫本)校訂・訳注 三角洋一『中世王朝物語全集5』笠間書
院 二〇一六年『木幡の時雨』(底本…甲南女子大学蔵)校訂・
訳注 大槻修(他)『風につれなき』(底本…丹鶴叢書所収の版本)
校訂・訳注 森下純昭『中世王朝物語全集6』笠間書院
一九九七年『苔の衣』(底本…伊達市開拓記念館蔵四冊本)校訂・
訳注 今井源衛『中世王朝物語全集7』笠間書院 一九九六年
『恋路ゆかしき大将』(底本…九条家旧蔵)校訂・訳注 宮田光『山
路の露』(底本…第一類本の承応三年版本「稲賀架蔵」)校訂・訳
注 稲賀敬二『中世王朝物語全集8』笠間書院 二〇〇四年
『室町物語集上』(新日本古典文学大系54)岩波書店 一九八九年
『あしびき』(底本…逸翁美術館蔵 校注 市古貞次)『鴉鷲物語』
(底本…東京大学附属図書館蔵の寛永頃古活字本 校注 沢井耐
三)『伊吹童子』(底本…大英博物館蔵 校注 沢井耐三)『岩屋
の草子』(底本…大東急記念文庫蔵の江戸初期絵巻三巻「岩屋」
校注 秋谷治)『転寝草紙』(底本…国立歴史民俗博物館蔵高松宮
家伝来禁裏本のうちの絵巻 校注 田嶋一夫)『かざしの姫君』(底

7

本…ハーバード大学付属フォグ美術館寄託の絵巻物 校注 市古
貞次)『雁の草子』(底本…京都大学附属図書館蔵 校注 市古貞
次)『高野物語』(底本…宮内庁書陵部桂宮本 校注 市古貞次)『小
男の草子』(底本…天理図書館蔵の室町末期写の絵巻 校注 徳
田和夫)『西行』(底本…岐阜県高山市歓喜寺蔵江戸初期写本 校
注 秋谷治)『さ、やき竹』(底本…国文学研究資料館蔵 校注
沢井耐三)『猿の草子』(底本…大英博物館蔵の絵巻 校注 沢井
耐三)
『室町物語集下』(新日本古典文学大系55)岩波書店 一九九二年
『しぐれ』(底本…大東急記念文庫蔵の写本 校注 沢井耐三)『大
黒舞』(底本…国文学研究資料館蔵の近世前期写の絵巻 校注
徳田和夫)『俵藤太物語』(底本…学習院大学日本語日本文学科研
究室蔵絵巻 校注 田嶋一夫)『毘沙門の本地』(底本…慶応義塾
図書館蔵 校注 徳田和夫)『弁慶物語』(底本…チェスター・ビー
ティー図書館蔵 校注 徳田和夫)『窓の教え』(底本…内閣文庫
蔵本 校注 田嶋一夫)『乳母の草子』(底本…東京大学総合図書
館写本 校注 秋谷治)『師門物語』(底本…国会図書館蔵写本
校注 田嶋一夫)
『説話』出典
『江談抄』(底本…国文学研究資料館 史料館蔵本)校注 後藤昭
雄(他)『新日本古典文学大系32』岩波書店 一九九七年
『古本説話集』(底本…文化庁蔵本「梅沢記念館旧蔵」)校注 三
木紀人(他)『新日本古典文学大系42』岩波書店 一九九〇年
『古事談』(底本…和洋女子大学附属図書館蔵本)『続古事談』(底
本…名古屋大学附属図書館小林文庫本「平仮名本」)校注 川端
善明・荒木浩『新日本古典文学大系41』岩波書店 二〇〇五年

『発心集』（底本…慶安四年刊本）校注 三木紀人「新潮日本古典集成第5回」新潮社 一九七六年

『閑居友』（底本…前田育徳会尊経閣文庫蔵本）校注 小泉弘（他）「新日本古典文学大系40」岩波書店 一九九三年

『宇治拾遺物語』（底本…宮内庁書陵部無刊記古活字本 校注・訳 小林保治・増古和子「新編日本古典文学全集50」小学館 一九九六年

『撰集抄』（底本…松平文庫蔵）西尾光一編「古典文庫第三七〇冊」古典文庫 一九七七年

『十訓抄』（底本…宮内庁書陵部蔵本「片仮名本」）校注・訳 浅見和彦「新編日本古典文学全集51」小学館 一九九七年

『古今著聞集』（底本…宮内庁書陵部蔵「二」本）校注 永積安明・島田勇雄「日本古典文学大系84」岩波書店 一九六六年

『沙石集』（底本…市立米沢図書館蔵本「興譲館旧蔵」）校注・訳 小島孝之「新編日本古典文学全集52」小学館 二〇〇一年

注1

8

『歌論集 能楽論集』久松潜一（他）校注（日本古典文学大系65）

岩波書店 一九六一年 『無名抄』（底本…静嘉堂文庫蔵本）『近代秀歌』（底本…定家自筆本）『詠歌大観』（明応四年書写本「久松潜一蔵」）『毎月抄』（底本…伝道増法親王筆本「久松潜一蔵」）『後鳥羽院御口伝』（底本…慶應義塾大学図書館蔵）『為兼卿和歌抄』（底本…宮内庁書陵部蔵本）『正徹物語』（底本…東素珊奥書本正徹日記「久曾神昇氏蔵」）

10

『歌論集 能楽論集』久松潜一（他）校注（日本古典文学大系65）岩波書店 一九六一年 『風姿花伝』（底本…第五まで金春本、第六世阿弥自筆本、第七吉田本）『至花道』『花道』（底本…金春本）

『遊楽習道風見』『九位』（吉田本）『拾玉得花』（底本…金春宗家本）『三道』（国会図書館本）『申楽談儀』（二十八段まで種彦本、二十九から補遺まで堀本、別本聞書堀本）

11 「新編日本古典文学全集44」小学館 一九九五年

『方丈記』校注・訳 神田秀夫（底本…大福光寺本）『徒然草』校注・訳 永積安明（底本…烏丸光広本）

12 『歎異抄』（底本…蓮如本）校注・訳 安良岡康作「新編日本古典文学全集44」小学館 一九九五年

13 『続教訓抄』正宗敦夫 編纂 「日本古典全集」日本古典全集刊行会 一九三九年

14 『榮西禪師集』編者 藤田琢司 禅文化研究所 二〇一四年 『喫茶養生記』（底本…初治本）

15 『無名草子』（底本…天理図書館蔵『無名物語』）校注・訳 久保木哲夫「新編日本古典文学全集40」小学館 一九九九年

16 『古代中世芸術論』校注 林屋辰三郎「日本思想大系23」岩波書店 一九七三年 『入木抄』（底本…前田育徳会尊経閣文庫蔵本）

17 「新潮日本古典集成 第四六回」新潮社 一九八一年十月

『教行信証』（底本…東本願寺蔵「日本思想大系11」岩波書店 一九七一年）『歎異抄』（底本…西本願寺蔵蓮如本）『三帖和讃』『浄土和讃』『浄土高僧和讃』（底本…専修寺蔵国宝本）『正像末法和讃』（底本…専修寺蔵願智書写本）『末燈抄』（底本…「真宗聖教全書二宗祖部」に収められている本文）

『日蓮』（日本思想大系14）岩波書店 一九七〇年）『守護国家論』（底本…平賀本）『顕謗法抄』（底本…日乾真筆対照本）『南条兵衛七郎殿御書』（底本…日興書写本）『法花題目抄』（底本…日朝書写本「身延本I」）『金吾殿御返事』（底本…真筆「闕失部分は信

伝書写本)『転重軽受法門』(底本:真筆)『観心本尊抄』(底本:真筆)『如説修行鈔』(底本:平賀本)『顯仏未来記』(底本:日進書写本)『富木殿御書』(底本:真筆)『法花取要抄』(底本:真筆)『可延定業御書』(底本:真筆)『撰時抄』(底本:真筆)『忘持経事』(底本:真筆)『報恩抄』(底本:日乾真筆対照本)『四信五品抄』(底本:真筆)『小蒙古御書』(底本:本満寺本「録外」)『下山抄』(底本:日法所持本)

On the meaning of the word “Ningen (human) ” in the Middle Ages.

Yang Qin

本稿は、日本語「人間」の意味が平安時代末期から現代に至るまで、どのような意味で使用されてきたかを明らかにするための研究の一部を成すものである。本稿では中世に成立した漢詩、日記、紀行文、物語、説話、歌論、能などの文芸作品と、親鸞、日蓮の著作から「人間」の用例を収集した。そして、「人間」の意味とジャンルとの相関関係について概観した。

This paper is part of a study to clarify the meaning of the meaning of Japanese “ningen(human)” from the end of the Heian period to the present. In this article, I collected examples of “ningen” from literary works such as “Kanshi”, “Nikki”, “kikohbun”, “Monogatari”, “Setsuwa”, “Karon”, “Noh”, edited in the Middle Ages, and writings of Sinran and Nichiren. Then, an overview of the correlation between the meaning of “ningen” and the genre was given.